

会社人としての“林住期”

古来、インドには人生を4つの時期に分ける「四住期」という考え方もしくは教えがある。最初の学生期（がくしょうき）は師のもとでヴェーダ（バラモン教の聖典）の学習を行う。これを終えると、自立して職業に就き、一家の主として妻子を養う家住期（かじゅうき）に入る。次の林住期（りんじゅうき）が興味深いのだが、孫が生まれる頃になったらすべての財産を捨てて森林に住むのである。自然と向き合って、自分自身の人生を静かに見つめ直す時期と言うべきであろうか。そして最後の遊行期（ゆぎょうき）には、あらゆる執着を捨て去り、解脱を願ってただ独り遊行せよと説く（岩波文庫『マヌの法典』）。

これを自分にあてはめてみると、まだ職業に就いていることからすれば家住期ということになるが、人生80年として4等分すれば林住期に入っている。すると、いまは懸命に仕事に打ち込んできた生活を振り返り、これまでの生き方を謙虚に反省し、会社人として、そして個人としてこれからの人生をどう生きるのかを見定めるときということになる。このような林住期をどう生きるかが、人生の後半を生きていく上でとても大事だと私は思う。

会社人として考えてみよう。20数年仕事をしてそれなりのポジションに就いてくると、経営の手法に関する知識や経験則だけでは立ちいなくなる状況に、誰もが直面するであろう。そういうときにこそ、人間の基本的な

倫理や道徳にも通じる、仕事をする上での自身の哲学が必要であると強く思う。

企業である限り、利益を追求し事業拡大を図るのは当然である。しかし、数字としての目標だけを見ていると、その結果に一喜一憂することになる。そうではなく、事業環境が良いときでも悪いときでも、仕事をする上で自分を普遍的に支える考えを根底にしっかりと持つことが大切なのだ。この普遍的な考えをいつ身に付けるかと考えたとき、四住期という考え方はたいへん参考になる。

四住期の教えでは、林住期は仕事を離れ哲学にふける時期とされる。しかし、会社人である私たちにそこまでの余裕はないし、仕事でもまさに脂の乗りきった時期である。そんななかで、自分を支える普遍的な考えをどうやって確立できるのだろうか。筆者はそのひとつの方法が、仕事とはまったく異なる環境で、仕事とつながりのない人々と活動をともにすることだと考える。ボランティアでも趣味のサークルでも、自治会活動などでもよい。重要なのは、会社の価値観が通じない場所で、通じない人たちとともに活動することで、自分にとっての永続的な価値を見出すことである。それこそが、自分が生きていくことの意味を明らかにするのではないだろうか。会社人としての自分をいったん離れたところでの経験を重ねることで、たんなる知識や経験則を超えた、人間としての根本的な考え方を身

野村総合研究所
執行役員
証券システム事業本部
副本部長

中村正秀（なかむらまさひで）



に付けるのが理想と言えよう。

少しオーバーに言えば、現実の世界と精神の世界を行き来して自身を見つめ直すのが林住期であろう。この時期を会社との関係で考えるにせよ、あるいは個人の生き方のレベルで考えるにせよ、重要なのは、折り返し点を過ぎた人生の後半を生きるための理念を確立する時期だと自覚することである。

当社OBである玉田樹氏の著書『兼業・兼居のすすめ』（東洋経済新報社 2006/3）では、都市に住む人の地方“兼居”がテーマとなっている。本拠地としての都市部の住居とは別に、自然への回帰と、自己本来の能力の回復を実現するために、郊外や地方に“別途の住まい”を持つことを勧めているのである。

じつは筆者も少し前から“兼居”を実践している。現在、子供の学校の都合で家族は実家近くの九州・大分におり、筆者は単身で横浜に住んでいる。毎週末は大分で過ごし、日曜の夜に戻って来ると言う、多くの人から「大変ですね」と言われる。しかし本人にとっては、これが仕事から解放されてリフレッシュするための最高の方法なのである。以前までの、なんとなくのんびり過ごしていた週末に比べると、5倍も10倍も新しいエネルギーが蓄えられる気がするから不思議である。

これはなぜなのだろうか。たんに地方の自然が豊かな世界で過ごすとか、家族に会えるというだけではない何かがあるのだ。それは、

会社という現実世界を離れて多様な人間関係を築くなかで得られる精神的な豊かさを実感できるからだと思っている。週に一度、会社人としての殻をすべて脱ぎ去り、一人の人間としての生き方を見つめ直すことのメリットは計り知れないと感じている。

さまざまな人と、さまざまな経験をするなかで、喜怒哀楽の色々な感情を抱きながら、自分の行動や考えの奥底にあるものに気づくことができ、そして自分がこれから何をしたいのかを明確に認識することができたら、そこから今後生きていく上での自身の道標が見えてくるだろう。一個人としての哲学を確立すること、それは定年近くになって考えたところで、けっしてできるものではない。

京セラの創設者である稲盛和夫氏は『人生と経営』（致知出版社 1998/9）のなかでこう語っている。「経営や人生は、これまで下した判断の集積であり、その判断する基準に、経営者の考え方すなわち経営哲学が色濃く反映している。経営や人生のさまざまな岐路において正しい判断ができるか否かで、経営や人生の結果が左右されてしまうのだ」。

筆者も兼居を始めて3年がたつ。まだまだ自分が生きていく上での哲学なるものを思索しはじめたばかりである。会社人生の後半と、さらにその先の人生を支えるための哲学的な時間を、しばらくは大分で毎週楽しみたいと思う。